

福島原発事故後の放射線科の対応を振り返って

東日本大震災による福島原発の事故から8年がたちました。当初の大混乱をご記憶の方も多いと思います。原発事故にともなう放射線汚染はまだきわめて身近な問題ですが、福島から離れた地域では少し時間の経過した問題にも思えます。

原発事故現場から放射性物質が周囲に散布されていることが確認され、大きく報道されました。それらによる被ばくを心配する住民の方々に対して、桐生みどり医療圏の放射線科専門医として意見を求められることもありました。当時の多くの放射線科医師と同様に私も原発から離れた地域の放射線被ばくは問題ないでしょうとお答えしていました。多くの放射線科医師は、福島県以外の地域における被ばく線量について、医療被ばくの線量や自然の放射線被ばくの線量と比べ相当に低い値と理解し、そのためにある意味素直な表現として「問題ないでしょう」という言葉であったとは思いますが、そこには放射線被ばくについて強い不安を持った方々、特に小さいお子さんのおられる親御さんたちの気持ちを理解していなかったと思います。上から目線でいくら安全ですと言われても全く安心できず、むしろ危険を隠蔽されているように感じられていたのではないのでしょうか。

放射線に携わる医療者たちは私自身を含めて、微量な放射線被ばくに関する知識を持っていますが、その知識も自分自身が実験したり、実際に計測して得た知識ではなく、教えられたり、書物や講演から得た情報です。当時もネット上で放射線被ばくに関する様々な情報がありましたが、それらの情報と何が違うのでしょうか？その違いは情報の信頼度ということになるのでしょうか。しかし、信頼度を判定するのもやはり難しいことです。結局は国際機関だから、学会の認証をうけているから、これまで信頼してきた専門家だから等のことでしかありません。不安な気持ちを理解し、不安な気持ちを持った目線でのお話が必要であったと思っています。いまは、私自身が感じた放射線被ばくとその伝え方について、放射線科に研修にきた医師の方々に反省を込めて伝えるようにしています。

日本の平均的な自然放射線の被ばくは、年間2.1mSvと報告されています。放射線被ばくに対する判断はこの値を前提とし、地域によって多少のばらつきがあること、そのばらつきの範囲内では健康への影響にはっきりとした差はないことを受け入れることから始まるように思います。

【副院長兼放射線科診療部長 高橋 満弘】

